F-M-Q

Romi-O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆ－Ｍ－Ｑ

【Ｎコード】
Ｎ１２１０Ｎ

【作者名】
Ｒｏｍｉ－Ｏ

【あらすじ】
相崎花梨（２３）は彼氏と同棲を始めて１年、なんだかんだと喧嘩しても仲良くやってきたつもりが花梨は振られてしまう。
泣きながらヤケ酒を煽っていると目の前には車が・・・
目がさめたら天国？でした。

◇◇タイトルを変更しました◇◇

最悪な一日（前書き）

初めての投稿です。内容も決めないまま書いてしまっている状態です＞＜
でも、こんな物語好きだな・・・って作者好みの作品書く事に目標を定めています。
面白くもないかもしれませんが、暇つぶしにもならないかもしれませんがｗｗ
読んでやってください。色々なご意見・ご感想お待ちしてます。

最悪な一日

最悪な一日とはこうゆう事を指すんだ。

午後１７：００分・・・・ようやく仕事も終わり、早く帰りたいなぁと思いながらも電車は決まった時刻にしかやってこない。

午後１７：０７分・・・・待ちに待った、最寄駅行きの電車がやってくるが、混雑していて不快指数上昇。

午後１７：４５分・・・・ようやく駅に着く。が、家には戻らずスーパーに買い物に行く。

午後１８：０８分・・・・夕方時の買い物ラッシュにも巻き込まれさらに不快指数を上昇させながら帰宅。

午後１８：０９分・・・・扉を開けると女物の靴を発見、どちらさま・・・・？

◇◇◇◇◇◇◇

「あ・・・れ?!真菜美?!やだ、久しぶり!!なんだ～電話くれたらよかったのにー、ご飯高志と私の分しか材料買って来なかったよ～あはは・・・・え?」

ただならぬ雰囲気を感じ、後ろを振り返ると顔を俯けた真菜美と土下座をした高志がいた。

「なになに・・?え?」「花梨ほんと悪い。真奈美妊娠した」

私はその時、鼓動が一気に早まり体中の血が急激に沸騰したような感覚に陥った。

体は［聞きたくない］と反応しているが頭は［どうゆう事?］と真相を求めた。

――――で・・・それの何がいけないっつうわけ・・・?

俯いていた真奈美がその言葉に顔を上げた。

「高志ちゃんの事取るつもりなんてホントなかったの!!私と花梨は親友だし大好きだし・・・。でも・・でも・・ね?赤ちゃんができちゃって・・・したら、私・・・」

「ちょっと待ってよ、いつから?いきなり結果だけ話されてもわかんないよ」

なんて馬鹿な質問だろう。そんな事聞いたってしょうがないじゃん。

「え・・・と、ここに引っ越してきた時、引越し祝いしただろ？みんなで。」

仲いい面子を集めてした引越し・同棲祝いの日だ。

「あの時酒足りなくなってマナとコンビニいって――――」

ナンデスカ？ソノ「マナ」ッテ・・・。

その瞬間私の中で何かが弾けた。

「あぁ。あん時真菜美酔ってた上に彼氏にフラれて落ち込んでた時だもんねぇ」

実際には落ち込んでなんて可愛いもんじゃない、酔ってワンワン泣いて手がつけられなかった。

「花梨の事考えると俺にはマナと結婚するって言えなかった。」

その瞬間真菜美の目の色が変わった。

「赤ちゃんの為にも高志と別れてくれるよね？花梨」

何その態度。

「うん、あげる。私のお古でよかったら、せいぜい幸せになってね。まぁなれないと思うけど」

「そんな言い方――」

「高志はあんたが立証済みな通り浮気者だし、あんたも振られてすぐに『親友』の男とできちゃう子だもん、先もたかがしれた未来でしょ、子供だけは大事にしてあげてよね。高志、あんたも浮気もほどほどに、この部屋はあんた名義だし家具は結婚祝いにあげるから捨てるなり使うなりして。」

じゃ、と言って私は立ち上がった。

「絶対幸せになる、花梨の分も」

最後まで憎たらしい女だな。ふと高志を見ると今にも泣きそうな顔をしながら私につぶやいた。

ごめん。

謝るならしないでよ、と言いそうになった。謝って戻ってくるなら許してしまうかもしれない。
涙を見せないで出ていくのがやっとだった。

午後１９：３５分・・・・みっともないが泣きながら1年暮らした街を歩く。

午後２０：０８分・・・・思い出をつまみに馴染みの酒屋で買った酒を飲み虚しさを感じる。

午後２０：５９分・・・・５本買ったテキーラを最後の一滴まで飲み干し公園を出る。

午後２１；００分・・・・目の前に車のライトがあった。

天国は草原

目が覚めたら草が一面にびっしり生えていた。
私は見た事ないけど、草原ってこんな感じなんだろうな。
とか考えてみる。

・・・・・？

目が痛い。
その事でようやく自分の置かれてる状況を思い出す。
あぁ・・・振られたんだっけ。
で、泣いて泣いて・・・酒を浴びるほど飲んで・・・
泣いて、酒、泣いて、酒ってなって・・・実家帰ろうと思って公園
でて
・・・あ！車！

「そっか。ここ天国なんだぁ。私でも天国来れたんだ」
ちっちゃい頃地獄の様子を本で読み死を恐れた事があった。
幼かったけど、私は地獄行きだと確信した。
その本には「牛や豚を食べた事により罰を受けてる図」と書いてあ
ったからだ。

「私・・・死んじゃったんだ、・・・天国が草原なんて聞いてない
よ！！もっと・・・ギリシャ神話みたいな神殿イメージしてたわ」
それも変だな、地獄は閻魔様がいてグツグツ沸いてる血のイメージ

で天国は今にも天使がでてきそうなイメージしてたなんて。
「さすが日本人、私生粋の日本人だな。」
なんて一人でどうでもいい事をつぶやきながら草に身をあずける。
自分が死んだなんて事を深く考えるのがなんかつらかった。

空には雲がぽっかり浮かんでいて気持ちいい。
――ぽっかり・・・あれ？天国ってどこなんだろ？勝手に空だと思ってたけど、雲は遠い。ってメルヘンすぎか、私。
宇宙だってあるのに、空に天国の居場所なんてないじゃん。
ここどこなんだろ・・・？死んだばーちゃんが迎えに来てくんないかな。

あ。そうだ、誰もいないんだ。
天国ってもっと人いてもいいんじゃないの？
要領オーバーってくらいいてもおかしくない。
けど、綺麗な神殿とか湖とかあって、天使様はもちろん綺麗で・・・

空想を脳内で進めていると右手に何かが触れた。
「うぎゃあ！！！！」
女らしからぬ声をあげてしまった事にも驚いたが何よりも目の前にいる綺麗な人に驚いた。
「天使・・・？」

「は・・・？何？こんな危ないとこで女一人寝てるなんて自殺でもしようとしてたわけ？しかも天使って・・・」

プププ・・・と笑っている人に私は素直に
「性格悪そう・・・あ、てか悪いのか、顔は綺麗なのにね、で、なんの用？」
若干顔を赤くしながらその人は言った。
「き、綺麗って。。。お・・・女って合ってたんだな！もしかしたらって女かなって思って助けに来てやっただけ」
「失礼だなぁ、まぁ確かにさっきはすごい声でちゃったけど、ところで天国にも危険な場所あるんだ！」
「天国？お前頭いっちゃってんの？ここマドゥーシュカだけど？まぁ天国行きたいならここにいれば？じゃ」

そうゆうとそいつはさっさと歩いて行ってしまった。

「―――マドゥーシュカ・・・？」

醜いウサギさん

私は慌ててそいつを追いかけた。
「なんだよ、変人」
まじで失礼だコイツ。でも抑えなきゃ、確認してからね・・・・キレるのは。

「あの、マドゥーシュカってなんですか？」
「はぁ？ここの国の名前ですけど―？あんたなんなんだよ、なんでジャスク草原にいるわけ？」
「ジャスク草原・・・。あの、ここって天国じゃないの？あなたにも天国って概念があるって事は違うんだろうけど、お願い答えて」
「ちげぇよ、何？死にたいの？」
そいつの目つきがいきなり変わりわずかに手を動かした。
あれは間違いなく剣であろう物に手をかけながら私を見つめる。
「え。いや。あの。」どこから説明すればいいのかわからない。
「はぁ～・・・で？」「え？」「何が知りたい？」

目つきがちょっと穏やかになった事に安堵を覚えた瞬間ストンと腰が抜けてしまった。
「何してんだよ」
冷たい声がかかる。
ほんと私何してんだろ…。
またもや素直に出てしまった。

「何してるのかわかんないの」「は――」「だってここ日本じゃないんでしょ？！」
「何ニホンって」「あんた外人みたいなのに言葉通じてるしなんか

変！」「お前が変」
「わかってるってば！ちゃちゃいれんな！黙れ！」
しまった、イライラして声を荒げてしまった。
「わかったから落ち着けよ、ここで待て、いいな？」
あまりに真剣な様子に私は怒りも忘れて首を縦に振っていた。

◇◇◇◇◇
あいつ魔物の気配に気がついてたんだ。
いきなり意味わかんない事言い出すし、怒鳴ってきたかと思えば、
不安そうな目で見てくるし。
魔物の気配を敏感に察知できるくせに魔物の生息地にいるし
武器のひとつも持ってないなんて、自殺願望があるとしか思えない。
でも俺が剣を向けた時の顔は死を恐れていた。
死にたい奴がする顔じゃない。
なんて事を考えていたら魔物はすぐ目の前まで来ていた。
「おっと、あぶねぇなー」
横に飛びながら呪文を唱える。
男が言霊を紡いだ途端魔物は動きを止め苦しそうに顔をゆがめた。
「悪いねー生憎お前と遊んでる暇なんて俺の人生に1秒もないの、
んじゃ」
そう言うと剣を振り落とした。
断末魔も聞こえることなく消滅した。

◇◇◇◇

なんだあれ・・・
それが私が始めて魔物を見た感想だった。
ウサギが何倍も大きくなって、目も一個で濁った赤色をしていた。
正直ウサギと一緒にするのが悪いくらいに可愛くない。
ウサギはあいつに突進してったかと思うといきなり足が木になり地面に吸い込まれるように動かなくなった。
であいつが何かを語りかけて消えた。
不思議と恐いって感じはしなかった。

醜いウサギさん（後書き）

戦闘描写が・・・書けまてん・・・

ダイヤモンド（前書き）

短くなってしまいました。

ダイヤモンド

「お待たせ、変人」
コイツほんと殺されたいの・・・？
「あれ、なに？」「あれって・・・ランクスじゃん」
ほら、と言って出してきたのはダイヤモンドのような綺麗な塊だった。

「綺麗・・・なんの石？」
「え？お前まじでわかんねぇの？糞じゃんランクスの」
「うえ！なんてもん見せんのよ！汚いなぁ！捨てなよ！」
正直あんな汚い見た目からこんな綺麗な〇〇〇が出るなんて・・・と思った。
「ばっか換金すんだよ・・・お前ってほんとなんも知らねぇのな。」
「だって」「かぁ～・・・ほんと変だよ見た目も中身も。」
真顔で言うわけ？そうゆう事・・・。

シラーっとした目で見つめていると「行くぞ」と声をかけられた。
何も言わずにジト目で見続けていると
「どんな事情があるかしんねぇけど、ここじゃ落ち着いて話も聞けねぇだろ？魔物が出るたびイライラされたんじゃ話んなんねぇよ。死にたくないならついて来いよ」

魔物が出るたびイライラ？
コイツ・・・誰がイライラさせてんのかぜんっぜん分かってないみたいだね。
沸々と怒りをわかせながら花梨はついていった。

ハロド村

ついて行ってから2時間は経ってるが会話がない。
てかココどこですか？

草原から出て一応道と呼べる場所を歩いて1時間３０分。

見事なほどなんもない。どこの田舎ですか？ってくらいに。
今までの道で何度もあのウサギ・・ランクスとやらに遭った。
その度あいつが倒してくれるけど、なんだか可哀想に思えてきた。

平和に育ったからかな、圧倒的な力の差でやられるランクスを見てると心が痛んだ。
「お前さぁ」
いきなり声をかけられ肩がびくっと反応してしまう。
「な・・なんだよ、やっぱ変なやつ」「なんですか？」
やはりジト目で言ってしまう。なんかこの人、気に触るんだもん。
「なんでランクスにあんな目向けるの？」「あんな目って・・？」
「なんか、悲しそうっつか・・・」「あぁ、ごめん、ここじゃ普通なのかもしんないけど私の世界じゃ普通の一般人が何かを殺めたりしないから驚いてるだけ」
「へぇ、お前の世界・・・ねぇ。じゃさ、なんで殺さないの？」
「え・・・」「魔物はさ、俺達を殺す為に来てんだよ？死にたくないなら殺さないといけない。だろ？」
「こっちの世界じゃ魔物なんていないもん。」「まじかよ？！じゃあ人が殺されたりとかそうゆうのない世界なわけ？・・・いいな。」
「あ、人同士で殺したりとかはあるよ、食料にする為に動物も殺め

るよ。でも好戦的に来るやつなんて普通に暮らしてたらなかなか出会えないよ。」「動物食うの・・・お前・・・」
うなずいたらすっごい嫌な顔された。

そんな話をしてるうちに村が見えてきた。
彼いわく〔ハロド村〕
中に入るとレンガで造られた家が連なっていた。水車があったり、井戸で水を上げ下げしている女性がいる。文明の進んでない場所なんだな。
そうやって町を観察していると一軒の店の前であいつが止まった。

看板には見慣れぬ文字に樽の絵がついている。
「ここは？」「見りゃわかんだろ、酒屋だよ。」「あたしお金なんてな――」
目の前にランクスの糞を出された。
「お嬢ちゃん、ランクスはクラスに変えられるの。どこの店でもね、わかりましたか～？」
いちいち腹だたしい。なんとかなんないの？！とは言いつつも今は頼れるのがこいつしかいない。

「クラスって――」「はいはいまず入ってからね。」
――カランカラン
小気味のいい音を鳴らしながら扉は開いた。

目を疑った。
店にはカウンターとテーブルが何個かある程度の小規模なたたずまいだった。
が、カウンターの中が問題だった。

オウムだ。あれはでっかいオウムだ。
「いらっしゃい、おぉカルゾ久しぶりじゃねぇか」「おぉ、個室がいい、頼む」
「あいよ、シャエズ！！案内したってくれ」「はい」

出てきたのは紛れもない猫。
二本足で立ち言葉もしゃべる。お辞儀も丁寧だ。しかもメイドさんな格好をしている。
口をパクパクしていると、猫にシャエズに声をかけられた。
「いかがなさいましたか？」「い・・・いえ」
ダラダラと汗がたれてきた。
「シャエズ気をつけろ、そいつは動物が大好物らしいから。こわいこわい」
シャエズの尻尾がフワーっと膨れた。
「私の世界でも猫は食べないよ。」「へー何食べるの？」「牛とか鳥とか・・・」
「信じらんねぇな・・・」私の世界では動物を食べると言ったら驚いてたわけだ。

これだけ人間らしいやり取りができれば私の世界でも食べないであろう。

そうして部屋についた。

酒場での攻防

部屋に入ると木で作られたテーブルに石でできた椅子（椅子と呼べるかも微妙）があった。
「とりあえず、ポポロとレブちょうだい。」
なに、ポポロにレブって。食べれんの？正直お腹はすいていた。

「お前は何頼むわけ？」「も！！！文字わかんないし何がなんだかわかんないもん・・・」

「なんだよそれ・・・。お前酒は飲める？」「うん」「じゃポポロ飲んでみ、まじで美味いから！な？！」
なんでコイツ酒の話になったら満面の笑みなのよ・・・。「わ、わかった、あんたに任せる」
「あんたじゃねぇよ、カルゾ」「カルゾ・・・ね、よろしく私は相崎花梨」
「お前貴族かなんか？」人につっこんでおいてお前かよ。
「ううん、一般人だよ」「苗字があるなんてめずらしいな・・・お前自体がめずらしいもんな」
と言いながら全身をまじまじと見る。「な・・・なによ」
「あーすいませんすいません、ちゃちゃ入れないから話して？また怒鳴られてもたまんねぇし」
一言余計な人ってカルゾみたいな事言うんだと思う。
「多分ね、色々確認しながらじゃないと上手く話せないと思うの」
「んあ？どうゆう事？」

地球という星にいた事。

「チキュウ？なんだそりゃ？新手の競技かなんかか？」
その中の日本という国にいた事。
「それそれ、さっきも言ってたよな～ニホン。聞いた事ねぇ国だな、よっぽどちいせぇんだろ」
私は車に轢かれて死んだと思っていた事。
「クルマってなに？お前さっきから何言ってんのかさっぱりだよ」
地球の概念がないアメリカ人なんていないよなぁ。
私にはアメリカ人っぽく見えるけど…日本語は通じてるし。

「とにかく私の質問に答えて！いちいちちゃちゃ入れないでね。今日本語に聞こえる？」
「アリアナに聞こえる」
「アリアナって私には初めて聞く言葉なんだけど、なに？」
「なにって…共通語…？」
「共通語…あ、酒場の文字ってアリアナ語？」
「おう！」
「アリアナ…じゃあ次の質問、私は魔物を見た事もないし、人間と同じく喋る動物なんて見た事もないの。この世界じゃ当たり前なの？」
「当たり前、お前の言う国がどんな場所にあってどんなんなのかはしんねぇけど魔物が出ない場所なんてねぇと思う。」
「だから私の国は地球って星にあるの！」
「星なんかに住めるわけねぇだろ？！あんなピカピカしてるだけの魔法に！」

「魔法…？」
「かぁー！！魔法もしらねぇってか？んなはずねぇよ、お前からは魔法の気が感じられるからな。」
「そんな！私の国では魔法なんてお伽話でしか出てこないよ」「どうやって生活してんの？」「電気があって…って電気ある？」
「デンキって何？」

これは私はメルヘンな世界に旅だっちゃったって認めざる終えないのかもしれない。

天国だと思ってた場所は異世界だったみたいです。

酒場での攻防２（前書き）

一話一話短すぎ・・・・？ご意見お待ちしてます！！

酒場での攻防2

「へーお前はじゃあ違う世界から来たんだ」
「驚かないの？」
「だってお前変だもん。俺髪が黒い奴なんて初めて見たし、言ってる事も・・・ね」
そんな哀れむような目でみないでよ・・・
「黒い髪の人がいないんだ。やっぱ日本じゃない。」
「お前の世界の奴は皆髪が黒いのか？」
「いや世界っていうより私の国には黒しかいないかな。」

驚いた表情をしている。そんな珍しいのかなぁ・・？

「ま、なんだかよくわかんねぇけど迫害を受けねぇうちに帰るんだな」
「迫害・・・？」

カルゾは私に一つ一つを教えてくれた。
この世界には魔法が生活において一番欠かせないものであり、大人から子供まで当たり前に使っている。
才能があれば出世も思いのままなんだそうだ。
魔法にも色々種類があるらしい。

「俺は大地の加護を受けてる。どっちかって言えば攻撃とかにはあんま向かないタイプの魔法しか使えねぇ、だから出世もしねぇー」
と一人で爆笑していた。

この場所はバレンシア大陸と呼ばれており3つの大きな国があるそうだ。

一つはシアヴィール帝国。
ガルゾいわく「戦うのが好きなおかしな連中の集まり」らしい。

2つ目はファルテリア王国。
ガルゾいわく「えらい美人な女王が君臨する国」らしい

3つ目はここマドゥーシュカ
ガルゾいわく「君主体制がない自由な国」らしい

「ちょっと待ってよ。最初の帝国って戦うのが好きな国なんでしょ？なんでマドゥーシュカは攻められないの？」
「マドゥーシュカにはな、人に呼ばれる名がもう1っこある。『魔物が治める国』だ。それだけ多い魔物を相手にしてまで手にいれる資源もない。土地を手にいれても魔物だらけ、お前なら無理して手にいれる？」
「いれない・・・けど」「それとな、魔法使いが圧倒的に多い国でもある」
「でも魔法使いはこの世界でかかせないんでしょ？そりゃいっぱいいるでしょ？」
「生活にかかせない魔法を使える奴なんて腐るほどいるよ。そうゆう奴をこの世界では魔法使いとは呼ばない。攻撃・治癒・補助魔法が使えて初めて魔法使いになれる。」
なんかよくわかんない・・・。

「他の国が太刀打ちできるような数じゃねぇし、みんなこの国が大好きで魔法使いって事に誇りを持った奴らなんだ。クラスを積まれて他の国に行く奴もいるけど、ここに魔法使いがゴロゴロ生まれてんだ。１人２人獲られたとこで形勢はかわんねーの」
「他の国にもいるにはいるんでしょ？」「あぁ、けど魔法使いってのは貴重な存在なの！なかなかできるもんじゃねーの！！はい！おしまい！あとはてめーの事考えろ！」
「何を考えろっつーの？！」
「どうやって生きてくかだ」

酒場での攻防２（後書き）

無念・・・眠気が・・・

ただただ待つ身

どう生きてくかを問われても、なんて返事をしたらいいかわからない。
自分が生きてきた世界とはあまりに違いすぎて。

「お待たせ致しました－ポポロ２つにレブ２つになりま－す」

届いた品は三ツ矢サ〇ダーみたいな色した飲み物と赤い色したジャガ芋みたいな物だった。

「ほら」

「え？」
「食えよ！めちゃくちゃうめぇよコレ！」

正直食べたくない色をしている。だってジャガ芋から血がしたたってるようになった上で湯気が出てる。

ほい、と言ってポポロを渡してきた。

「酒、飲めるんだよな－？」

「うん、好きだよお酒」

一口飲んでみると三ツ矢サ〇ダーの見た目が反則！ってくらい苦い。
渋い。サ〇ダーっぽいわりに炭酸ない。
なにこれ。まずい。

「な、なんだよその顔！うめぇだろー」
「まずい」

すごい形相で睨まれた。

「んだよ、じゃあ返せよ変人」

試しにレブも食べてみたがこちらはまさに見た目どうりの味を醸し出していた。

「なんなの…これ？」
「レブの実を煮たやつだよ」
「何で？」
「魔物の血で」

血、そうですか、血ですか。

まるでゲテモノを食わされた気分だがここではそれが当たり前なんだろう。
あまり否定したらおごってもらうのに悪い。

「お前の世界ではどんなん食うの？」
「さっきも言ったけど、肉・・・牛とか鳥とか豚なんだけどこっちにはいる？」
「お前入ってきた時見なかったわけ？ここのマスター」
「あれはオウムじゃん！」
「鳥は鳥だろ？」「あーゆーのはペットとかで飼うの！食べない」
「へぇ～・・・。」
「とか、野菜とか、あと魚も食べるし。あ、私の国では生でも食べるよ」
「気持ち悪いなぁ、お前が魔物なんじゃねぇの？」
「失礼な事いわないでもらえます？」
「ま、とにかく俺はこれ食ったら行くから」
「え？どこに？」

急に不安に襲われた。
この世界で一人で暮らしていくなんて無理だって思った。

「どこにって・・・勝手でしょ？俺の、お前と俺はただ道で会った他人なんだから飯屋連れて来てやっただけでも感謝しろよ」
「そ、そうなんだけど・・・」

そう言うとガツガツ食べ始めた。

「まぁ、こっちの常識を知るって事が一番重要なんじゃない？結構強い魔力は感じるし、世界に馴染めば魔法も使えるようになると思うよ、したらどこいったって通用するよ」
「さ・・・才能なかったら？」
「それまでなんじゃん？」「なーー」
「とーにーかーくお前はこっちを知らなすぎる。あーもう！しゃーねぇーな！助けてやるよ！！」

そう言って出ていってしまった。

◇◇◇◇

「あの～閉店時間なんですけど・・・」
「え？！あ？はい！今出ます」
とうとう帰ってこなかった。
腹が煮えくりかえるのを抑え急いで出ていこうと立ち上がった。
「あの！！・・・ク・・・クラスのお支払いがまだなんですが・・・」
「は・・・・はぁぁぁぁぁ？？？」

私の声は村はずれまで響いたそうな・・・。

ハロド村のハロドさん

「クラスがないー?!」

シャエズにマスターの所に連れてかれた私は素直に白状した。

「よろしければ事情をお聞かせもらえません?少しはお役にたてるかもしれませんし…」

シ…シャエズさぁーん。
猫耳とかメイド云々じゃなく萌えですよシャエズさん…

「おかしい人と思われてもいいです。さっきカルゾと喋ってて気がついたんです。私、異世界から来たんです」

半ばヤケクソになり下を向きながらまくし立てて言った。
オウムの首が忙しなく動き、猫の耳はピクピクと動いている。

「違う世界から来たってわけか…いらっしゃい」

マスター信じちゃっていいわけ…？
「それじゃあクラスとかわかりませんものね、まったくカルゾ君ったら…何も知らないお嬢さんを連れて来たあげくに置き去りにするなんて。」

シャエズさんはご立腹のようだ、尻尾が左右にパッタンパッタンと揺れている。

「あの…信じてくれるんですか？」
「嘘なのかい？」
「いえ！嘘じゃないんです！ただ私の世界でもしこんな事言ったら迷わず精神を病んでる人だって思われるし…」
「ほぅ…困ってる人を信用するのがうちらの心情でな。俺らもこんな見た目だ、他の国じゃ迫害を受けてきた。だから困ってる人に鞭を打つ真似はしたくない。お前さん、これからどうするんだい？」
「カルゾに言われたんです。私はこの世界の常識が足りないって。帰る手立てもたてなきゃいけないし勉強する為にもこの村で生活をしようかなって…常識を知って働けるようになったら必ずクラスを払いにきます！」

「あら、それはいいわ！じゃあ村長さんにご挨拶しなきゃいけませんわね」
「シャエズさん、厚かましいですけど案内してもらえませんか？！」

「ふふふ、ここにいらっしゃるわ」

私の目の前のオウムがバサバサと羽を広げて言った。

「ハロド村の村長ハロドだ、よろしくな嬢ちゃん」

村長だって事にも驚いたが、なんて安易な村の名前なんだ！とも驚いた。

すっとシャエズが私に近寄る。

「家内のシャエズです…あの――」

「あぁ！相崎　花梨です！カリンが名前です」

「よろしくね花梨ちゃん」

「はい、よろしくお願いします！」

なんて威勢のいい返事をしながらも、鳥と猫の夫婦かぁ。

やっぱシャエズさんが強いのかなぁ…なんて事を考えてた事は秘密にしておく。

生活1日目

私はハロドさんの屋敷に寝泊まりさせてもらう事になった。

何から何まで甘えてばかりじゃ申し訳ないので屋敷のお手伝いをさせてもらう事にした。

シャエズさんは「そんな事気にせずにこの村に馴染んでくれたらそれでいいんですよ」と言ってくれたが「村の方とお話したいし常識も知りたいので」と言うとようやく首を縦にふってくれた。

私が手伝うのは畑の手伝いと屋敷の掃除・洗濯、料理を長年のメイドさんに付き添い慣れていく事になった。
徐々にでいいですからね！人差し指を立てて念を押された。
猫が人間の大きさになって凄まれると結構恐い、シャエズさん怒らすべからず…とメモしておいた。
あの二人は酒場経営を趣味としてるので昼から夜遅くまで店にいて屋敷にはほとんどいないそうだ。

朝、扉がノックされて目が覚めた。
チュンチュンとは聞こえず、窓からは話し声が聞こえる。
「へぇあれが！」「本当に髪が黒いんだねぇ」とか。

雀は大きさが変わらないのに言葉を喋るんだ。
「開けますよー」
と聞こえて慌てて意識を戻す。

入って来たのは人間だった。
メイド服を着た。

「リエラと申します。この屋敷のメイド長をしております。」

私が聞いていたのは長年勤めているメイド長さんだ。
でも私の目の前にいるのは１０歳前後の女の子だ。

「あ、初めまして！相崎　花梨と申します！今日からよろしくお願いします」
「ふふふ、威勢がよろしいようで…これから毎日楽しくなりそうです。」

そう言って握手を交わした。
脳内メモに友好の証に握手をするのは変わらないらしいと書き足す。

最初に行った場所は畑だった。

「まずはレブの実、アイスの実、ナナの３つを収穫していきます。」

アイスの実！！！！
思わず笑いそうになってしまった。まぁ私が想像してるアイスの実とは別の物だろうけどどうしてもアレが出てきてしまう。

「その後に水やりをして、朝食の準備をしなければならないので飼育小屋に行きます。」

「はい」

返事をしてさっそく収穫にかかる。

レブの実はまさにジャガ芋だった。
もっと美味しくできると思うんだけど…。
つい昨日のレブの実を想像してしまう。

アイスの実はにんじんみたいだけど丸い形をしていて、冷やしたらアイスの実に見えない事もない。
ちょっとでかめのアイスの実って感じだった。

ナナは玉葱みたいだけどとてつもなく大きかった。

そのせいか「ナナは一つでいいわ」と言われた。

水やりをしようと井戸を探すがない。ジョウロもない。
途方に暮れているとリエラが何かを口づさんだ。

途端空からばしゃばしゃと音を立てて水が降ってきた。
驚いているとリエラが私の方を向いた。
「ごめんなさい、魔法が使えないんでしたね、水やりは私に任せてください」
と微笑んだ。

「井戸はね、町にしかないの。町には水を出す魔法を使えない人もいるから…井戸が枯れそうになったら水魔法を使える人が足すのよ、火魔法を使える人は種火をあげるわ。お互いに支えあって生活してるの」

そうなんだ、と思って手のひらを見る。
「私は…いったい何の魔法が使えるんでしょうか？」
「ん一感じた事ないような魔力を感じるんだけど…火でもないし水でもない…んー…風？違うわねぇ」
と悩ませてしまったので、いいです！使えるようになれば分かる事

ですし！と打ち切った。

そうした話をしているうちに飼育小屋に着いて目を見開いた。

すでに小屋じゃない。

それが感想だった。

『ギェーギェー』
と耳を塞ぎたくなるような声でこちらに向かって来たのはピンク色で所々緑の毛が生えた鳥？だった。
「あら、お腹空かせちゃったかしら？ごめんね」
と言ってリエラは扉を開けて中に入って行く。

「リエラさん！！あ…危なくないんですか？！」

それはキリン並の大きさがある怪鳥だ。

「…ナダルも知らないんですか！」
と驚かれたが、頷くと説明してくれた。

「食用の魔物です。美味しいですよ、この子」と撫でまわす。

ナダルは危険を察知したのか小屋の奥へと走っていってしまった。

「今日は捌いたりしないのに」と言いながら卵をとった。

「さっ！これで朝食の準備完了！厨房に行きます。」
と呆然としている私を置いてさっさと行ってしまった。

私は丁寧に扉と鍵をしめて後を追った。

生活1日目（後書き）

シャエズさんは人差し指を立てると隠していた爪もでちゃいます。

朝食の席（前書き）

更新が遅れてしまいました・・・。

朝食の席

慌ててリエラを追いかける。

すると彼女は屋敷の裏口で誰かとお喋りをしていた。
「リエラさーん」声をかけると彼女は私の方を振り返り、紹介してくれた。
「こちら厨房でコック長をしていらっしゃるゴーンズさん。こちらは今日からメイドをする事になったカリンさん」

コック長と言うより漁師？というくらい日焼けをしている。
大きなお腹をしていて、確かに料理に携わってます。といった見た目だ。

「おう、よろしくな、噂は色々聞いてるぜ？食べ物の事ならなんでも答えてやる」
「あぁ、ありがとうございます。ところで・・・私達はこれから何を？」
「お食事の準備の補佐をします。」
「俺が恐いっつんで若いもんが逃げちまって人がいねぇんだ、がっはっはっは」
コック長・・・すでに長じゃないじゃん、笑い事じゃないし・・・。と感じつつも苦笑いしておいた。
ハロドさんといいこの村には男っぷりのいいのが集まっているのかもしれない。

「さっきのナダルもゴーンズさんが捕まえてきたんですよ」
「ありゃ8代目だがな、最初ナダルのつがいを生け捕りにするって

んでそりゃもう大変だったんだ」
「それからは卵を孵化して飼育しているんです、とっても可愛かったでしょ？だから育ててるうちに殺すのが嫌になっちゃうの」
「そうですよね、愛着が湧いちゃうと・・・」
と言いながら厨房に入ると首を落とされたナダルがいた。

「～～～～！！！」
声にならない悲鳴を上げていたらゴーンズがやって来た。
「今日の晩はカリンさんの歓迎会をするっつんで豪勢にしてやろうって俺がさっき取ってきたんだ」
「い・・・今愛着がって話をしてたからびっくりしちゃって・・・」
腰を抜かしている私に手を差しのべながらリエラが言った。
「食べる為に餌を与えているんです。外で会えば敵以外の何者でもないんですよ、ナダルは本来ならば凶暴な生き物です。ここにいるのは８代にも続いて人間に慣れた魔物なんです。だから襲ってはこなかった。けっして外で遭ったからといって近づいてはなりませんよ？食用で捕まえやすい魔物と言えども、魔法に対して無防備な今とても危険です。」
「は・・・はい」
見た目が小さなリエラに説教を受けてしまった・・・。
「殺されない為にその１・・・「可愛くっても魔物は魔物」ですわね、さ！ゴーンズさん、カリンさん、そろそろ旦那様と奥様が起きる頃合ですよ～シャキっといきましょう」
そういって野菜を流しにおき魔法で出した水でバシャバシャと洗いだした。
ナダルを可愛いと思った事など一度もないが覚えておこう。
「知識が必要だな、がっはっは」
ゴーンズがそう言って床においてあった大きな鍋を持ちあげた。
「それはなんですか？」
「これはな、ナダルの血だ。これでレブの実をどっさー！と入れて

グツグツー！っと煮るとたまらんのよ」
あぁ・・・・またあれか。
内心がっかりしながら聞いた。
「この世界ではこれは普通にどこ行ってもある料理なんですか？」
「おうさ、マドゥーシュカ料理ってやつだ。マドゥーシュカの人間はこれがなきゃはじまらねぇ！！」
やっぱり私は違う世界の住人なんだなぁ、と思った。

ゴーンズが言葉通り鍋にどっさー！とレブの実を入れてる頃リエラと私はパン？とサラダの準備をしていた。
材料はナナとアイスの実だ。
「うん、ナナをこうやって薄く薄く切ってこのお皿に並べてください。私はアイスの実を切っていきます」
包丁がでかすぎてやりずらいったらありゃしない！どこかの海賊かなんか？ってぐらいに大きい。
マドゥーシュカの人間はこんなもんを使って料理をするのか・・・。
まぁあんだけ大きな魔物を捌くんだからそりゃそうか・・・。

まるでふぐ刺しのようにナナを並べていく。リエラはナナとナナの間にアイスの実を並べていく。
「さ、できましたわ。ゴーンズさん？そっちはいかがです？」
「おう！ばっちりよ！今日も美味しいゴーンズ料理ってね」

鼻歌を歌いながら鍋をかき回す。

「うふふ、ではよそっておいてください、ファファを切ったら運びます」
「ファファ？」「なんでい、ファファも知らないのかい？」
コクコクと頷く。「こいつぁ世界共通だと思ったんだがなぁ・・・」

どうやらゴーンズさんは私が異世界から来た事は知らないらしい。
「いいかい？こいつはウィトを挽いて水とハルの乳と塩を入れてとにかくコネまくる、でぽいっと置いておいてガーっと窯で焼くと美味しい！っつー魔法の料理だ」
なんだかよくわかんないが頷いておいた。私の世界ではパンだろう。小麦がウィトと呼ばれていて謎のハルの乳があるだけだ。

「これで料理はでそろいましたわ、さ、カリンさん行きましょう」
ファファをカートに乗せて、ゴーンズさんにお辞儀をして厨房を後にした。

◇◇◇◇

大きな扉を開けると、食事するのにこんな大きい部屋はいらないしこんな大量に彫刻はいらないだろうってくらい派手な部屋だった。
そこにはハロドさんとシャエズさんがすでに席についていた。

「おう、嬢ちゃん。よく眠れたかい？」
「カリンちゃんでしょ！」
とシャエズに頭を小突かれたハロド、クスクスと笑いながら私はかえした。
「はい、ぐっすり寝させてもらいました」
「まぁ、よかった。さ、カリンちゃんも座って」
「いえ！私はメイドなのでお席は一緒には・・・」
「まぁまぁ、固い事言わないですわんな嬢ちゃん」
「は・・・はい」
リエラさんがお皿に料理をよそって置いていく。

なんかすっごい悪い気がする・・・・。
「さぁ～いただきましょう、リエラありがとう」
はい、と返事をしお辞儀をしてリエラはこの場を去った。

「今日は朝食もお手伝いしてくださったんですよね、ありがとう、カリンちゃん」
「い！いえ、そんな、働かせてもらって感謝してます」
「リエラとゴーンズの他には会いました？」
「いえ、まだその二人だけです、二人ともよくしてくださって・・・」
「そう、よかった。それならやってけそうね！！！」
え？と思いキョトンとしていると
「あの二人屋敷でちょっぴり変わってるの、あの二人とやっていけるなら他のみんなともやっていけるわ」
「そ・・・そうだったんですか、そんな感じしませんでした」
「なら大丈夫ですね、お給金は毎日出します。それで沢山勉強をしてね。」
「はい・・・」
そう言って渡されたコインが５枚。
「あ、わからないかしら。」とオロオロしだした。
「それわ一枚１グラス１０枚集めりゃ１クラスになる。嬢ちゃんの給金は１ヶ月約１ジェラスと５０クラスになる。クラスを１００枚集めれば１ジェラスって紙幣になる。わかったか？」
「５グラスではどんな物が買えるんですか？」
「そうだなー、今日の朝食が５食は食える、一食１グラスってとこか。」
「１クラスは・・？」「じゃんじゃん酒も飲めて腹いっぱい飯も食えるってとこだな」
「まぁ詳しくは村でお買い物でもして知っていきましょう、そうだわ！あとでお買い物頼もうかしら」

「いいんですか？！お願いします！」
「うふふ、じゃあ朝食がすんで少し休んだら行ってきてちょうだい。リエラにお買い物リストを渡しておくから二人でいってらっしゃい。昼食も村でとっていらして？」
「わかりました！」

そうして私は村に行く事になった。

朝食の席（後書き）

１グラス６５０円くらいです。

あいつ（前書き）

更新がだいぶ遅れました。
ＰＣ故障…起動するとＩＤＥナンチャラＥＲＲＯＲと出る。。（。
＊，Д⊂グスン

あいつ

変な奴。

それがあいつに対する印象。
なんだかよくわかんねー事ゴチャゴチャ言ってるし、終始機嫌わりいし。
顔はまぁ・・可愛いっちゃ可愛いけど。

――まぁ俺はめんどくせーのはごめんだし、可愛くてもオツムがあれじゃあ宝の持ち腐れだな。

考えながらカルゾは換金所へ向かっていた。

マドゥーシュカではクラスを稼ぐのに一番手っ取り早いのが「魔物の討伐」だ。
マドゥーシュカ以外の国では、人間に対して敵意を剥き出さない所か懐いてペットとして市場に出されるような魔物や、闘争心はあっても弱い魔物がでるのみであり、この世界においてそうゆう専門の働き口が一般的というわけでもない。

マドゥーシュカには凶暴な魔物が数多く生息しており、つねに死と隣り合わせの生活を余儀なくされる。
その為魔術の需要が魔物討伐なのだ。

魔物を倒すと出る石は他の国ではアクセサリーの材料になり、凶暴な魔物からは純度の高い大きな石などが出たりする事も稀にあり高値で売買される。

マドゥーシュカで1番盛んな商売は「換金所」なのである。

「よぉ、クラスに変えてくれ」
「またお前さん？そんな頻繁に会いに行くほど魔物が好きなのかい？」

クスクスと笑いながら店の奥から真っ赤な髪をした目つきの鋭い女が出てくる。
この女はこの換金所の店主のルチカだ。

「やめろよ、本当なら見たくもねーんだって。」
「ふふ…そうだったね。本当は会いたいのは私だったりして…？」
「ニヤニヤした面で何言ってんだか…」
飽きれた顔をしてそう言うとまたクスクスと笑い途端に真剣な表情になった。
「あぁ、クラスの交換だったね、さ、それをよこして。」
腰にぶら下げていた袋をルチカに投げて店の中を観察した。
「随分儲かってるみたいだな、見たくもねーやつらの毛だらけじゃねぇか。」
「私は魔物は嫌いじゃないからねぇ。」
「むしろ好きなんだろ？魔物の毛が。気色わりぃ」

「ふふふ…私が好きなのはお前さんさ。」

こいつはいつもこんな事を言ってくるふざけた奴だ。
悪い奴ではないが。
かなり強い魔力を持っているが自分では絶対に魔物を殺したりはしない。
なんでも『私が殺したら毛皮がなくなっちまうだろ？ふふふ』との事だ。

「じゃこれ…またよろしく頼むよ。まいど」
ヒラヒラと手を振る。
俺はドサッと落ちた袋を広い中身を確認した。
「おい待て、かなり少なくねぇか？」「おやまぁ…それでも色をつけてるんだけどねぇ。」
「なんでだよー、お前しばらく見ないうちに意地汚くなりやがったな。足元見やがって。」
「お前さんランクスのおもちゃみたいな石が今だに人気があるって思ってるのかい？あっはは、そりゃあめでたい頭だねぇ。世間ってのは流行に敏感なんだよ？薬になるような石以外はつねに売れ筋が変わるんだ。クラスがほしいならもっといい物を持ってくるんだね。」
「……わかったよ。」
「今度来る時はもそっと流行を勉強してくるんだよ、お前さん。」
舌打ちをして出ていこうとした所をルチカに止められた。

「私は紫の毛皮がほしい、それならいくら出したって買ってあげる。あぁ、ちなみにお前さんならそのランクスの倍出してあげるよ。ふ

ふふ…」

俺は乱暴に扉を閉めて店を後にした。

オモチャの森（前書き）

携帯だとなかなか書きにくいですね。
ＡＵのＳＨ００１を使ってるのですが、ボタンが押しづらい。。（
。＊，Д⊂グスン

早くＰＣが買えるよ－に頑張って働き中です（。・ω・。）ノ
今日は休みなので続きを執筆予定です、２話くらい書き溜めしてお
きたい所ですね。

お気に入り登録をして下さっている方々！
かなりスローペースですが頑張って進めていきたいと思っています
ので見捨てないでくださいｍ（＿＿）ｍｗｗ

文章の長さ、誤字、脱字などなどご意見、ご感想お待ちしておりま
す。初の小説なので辛口コメントｗ覚悟の上です（；，∀、）＜
まず日本語がちゃんと書けてるのかが謎なので・・・Ｒｏｍｉ－Ｏ
を成長させてやってくださいｗｗ

オモチャの森

ハロドの村を出ると綺麗な湖のある森がぽつんと佇んでいる。食料となる果実やキノコなども多く湖には食べられるジャズという魔物が棲息している為、村人もその日の夕食の一品に…なんて理由で来たりする。

ハロド村の住民達には比較的安全な森なのだ。
湖に辿りつくのには２０分ほど歩けばいいだけの広くない森なのだが実際行くのにはかなり時間がかかる。

かなりでこぼことした歩きずらい地面にくわえ、さきほどルチカに鼻で笑われたオモチャ（・・・・）の石がでるランクスが最も多く棲息する森なのだ。

「それにしてもランクスがそんなに人気落ちてるなんて。貴族とかの好みってわかんねーな。」

ぶつぶつと文句を言いながら片手でランクスを薙ぎ倒しながら俺は森を進んだ。
今日はここでキャンプを張る事にしたのだ。
実はここの湖に住む魔物が好物だったりする。
湖に近い場所に目処をつけ呪文を唱えるとゴゴゴ・・・と音をたてながら鍬で耕している土のように地面がうねりをあげる。
１分もしない内にでこぼこした地面がまるで整えられたように平らな地面に変化した。
隅には整えた時に見つけたキノコが山積みになっている。

「なんて便利、俺ってキノコ狩りの天才？魔物なんか狩ってないでキノコ売ればいいのかもなー」
とかなんとか呟きながらせっせと寝床を作っていく。
たき火の準備も終わり、そろそろお腹も空いたなーと思い湖に好物の魔物を取りに行こうと立ち上がった。

その魔物のキノコ蒸しがかなーり上手いのだ。

歩きながら脳内で葉で包まれたジャズとキノコをたき火に放り込み１０分ほど待った後木の棒で取りだし酸味のある果実をキノコ蒸しにささーっと振り掛け食べる自分・・・
というやけに詳しいシミュレーションをたてる間に湖に到着した。

が、詳しく立てたシミュレーションも音をたてて崩れさった。

「な・・・なんだよこれ」

目の前にキラキラと光り時折パシャンと音を立てて飛び跳ねるジャズがいる湖はなくなっていた。

かわりに・・・的な佇まいで存在するのは透明でクリスタルのように光り輝く大きな神殿だった。

カルゾは魅入られたように神殿に近づくと今まで感じた事のない何かを感じた。

「・・・・・？」

触れてみようと手を伸ばすと上空からパキパキ・・・と不可解な音を立て何かが落ちてきた。
咄嗟に防壁を張り難は逃れたがよく見るとバリバリに割れたガラスのような物だった。

「っぶねー！！なんだよこれ」
殺す気かよ・・・と内心冷や汗物だったが手にとって見てみようとしたがそれは溶けてなくなってしまった。

「氷？」

カルゾは驚いた。
顔を上げてよく見てみると神殿は氷でできていた。こんな透明な氷は見た事がなかった。まるでガラスのように透き通っていてとても綺麗なのだ。
「ほわーすげー・・・」
と感銘の声を上げるが内心もっと驚いたのは神殿がある（・・）事だ。

ここは木々が沢山あるので森は日差しが届かなく薄暗いが、湖のある場所は開けており日差しが抜群なのだ。

溶けない氷などない。なのに水滴の一つも垂れてはいない。

よっぽど力のある魔術師でも氷という属性はない為、水を急激に冷やし固めるという魔術を使うが、実際水をない所から出したり自在に動かすのはたやすくても、それは水だから。であり瞬時に固めて氷と言う違う物にして何かに使うという行為は魔力を大量に使う為なかなか使う人もいない。
ましてや維持をするなんて事は魔力の無駄使いと言えるし、こんな大きい神殿を作り太陽がギラギラと輝く中維持するのは魔術師にとって自殺行為だ。
魔力がなくなった所を魔物に狙われて殺されるのがオチだろう。

「誰か・・・いんのか？」

誰かと言った所で周りには人の姿は見当たらないし、神殿も透明なのだが何故か中までは見れない。

すると神殿から響くように声が聞こえた。

「汝コノ神殿ニ入ル事ハモチロン触レル事モ叶ワナイト心得ヨ」

男とも女とも言えない声だ。
まるで男女が二重に重なっているような。

「お前誰だよ」

「オ前呼バワリスル無礼ナ輩ニ答エル義務ナドナイ立チ去レ」

「は？俺ここのジャズが楽しみで湖来たのにお前の神殿なんだかしんねぇけどそれのせいで計画が大分狂ったんですけど」

「ジャズハ我ガ子。ナンノ用カ知ラヌガコチラニハ用件ハナイ、立チ去レ」

「我が子？ってお前魔物？！！」

「魔物トハ人間ガ畏怖スル者スベテニ名付ケラレル。オヌシガ言ウ魔物トハ何ヲモッテ魔物ナノダ？」

「え・・・（汗）」

「オヌシガ答エラレヌモノハ私ニモ答エラレヌ。コノ神殿ハ待チ人ヲ待ッテイル私ノ為ニ私ガ我ガ子ラニ頼ミ作ッタモノ・・・湖ハ我ガ子デアル。言ワバ我ガ身モ同然。オヌシノモノデハナイノダ。立チ去ラネバ・・・・」

と神殿から響いた途端背中にぞくりと得体の知れない恐怖が走った。
「ちょ！！ちょい待ち！！！待った！！」
「ワカラヌ・・・叶ワヌ相手ト悟リナガラモ何故人間ハコウモ逆ラ

ウ？私ニトッテオヌシナドナイモノニ等シイ。」
「はいはい、分かってます。立ち去りますから。慌てんなよ」
「ウム、私モ気ガ長イ方デハナイノダ。理解シタナラ立チ去レ人間。
」
「んぢゃ！！」
とさっさと森に戻る時に神殿から聞こえた言葉にカルゾは目を見開
いた。
「コノ神殿ハ黒ノ瞳ヲモツ者シカ入ル事ハ許サレヌ・・・・」
振り返って見てみたがもう神殿は語る事はなかった。

オモチャの森（後書き）

さて、黒い瞳って判りやすすぎたかなーなんて思っているのですが・・・w

まだ恋愛要素は出てないし花梨ちゃんの能力も目覚めてないのですが、ようやく開花しそうな段階まで来ました。

もちっと早い更新ができるよーに頑張りますのでお付き合いしてくださいm（＿＿）m

はじめてのお使い（前書き）

仕上がった作品は次つぎアップしていくのがいいのか書き溜めして一気にアップしたほうがいいのか…小説を書いてる方いらっしゃいましたら教えてほしいですｍ（＿＿）ｍ

はじめてのお使い

花梨は買い物メモを見ながらリエラと話していた。

「なんて書いてあるんですか？」

「ほとんどがお酒ですね、店に必要な物の買い出しと屋敷の買い出しをするように書いてあります。」

うんうんと頷きながらも、字も読めないとなるとこれから大変だなー勉強しなきゃなぁ。と色々な問題が重なりゲンナリした。

屋敷からトボトボ歩いてもあっとゆうまに村の市場についてしまった。

屋台のような店が列になっており呼び込みの声があちらこちらで聞こえる。

市場は村の東側にあり小さいながらも毎日果物やパン、酒や肉など食料を主に扱っているらしい。

装飾品などは店に並ぶ事がないの？と聞いた所、村の婦人達いわく「着飾って見せる相手もいやしない」と苦い笑いをこぼした。

たまに行商人がやってきて髪飾りなどを広げるのが村の若い娘の楽しみなんだそうだ。

もちろん冷やかしが多数だが、たまに青春カップルが「ゴチソーサマ」な雰囲気で買っていくらしい。

私はリエラに
「買ってもらったりしないんですか？」とニヤニヤしながら言ったがなんか「え・・・そんな・・・」と言いながらモジモジしただけで答えはしなかった。
・・・うぶなのかもしれない。内心可愛いーなんて思いながらもつっこみはしなかった。

「カリンさんは恋人はいらっしゃるんですか？」
かーっと体が熱くなった。胸が締め付けられる。

「あー・・・それがフラれちゃったんです、それも最悪な感じで」

「あら、見る目がない男性ですね！こんなに可愛い人なのに・・・」とフォローしながらもちょっと気まずいオーラを感じたので別の話題をふってあげたらあからさまにホッとした。
そんな辛そうにしていただろうか・・・
その後も買い出しをしながら一軒一軒リエラに色々な事を説明してもらいながら探索していた。

すると一軒だけ立派な店構えの所があった。
「ここは何屋さんなんですか？」
「ここは換金所です、魔物からでる石をクラスなどに交換してくれます。まぁ・・・店員さんは変わり者ですけどね・・・」

「へぇー変わり者・・・どんな風に――」
「言ってくれるねぇ…かわいこちゃん。」

ビクっと肩をすくませるリエラ。

「ふふふ、お前さんも可愛いねぇ、どこから来たんだい？変わった毛色をしているねぇ？」

「遠い島国からです・・・」

「そうゆう変わり種は嫌いじゃないよ、むしろ好きだね」

クスクスと笑いながら私の髪を弄る。なんかリエラさんが言ってた意味がヒシヒシと伝わってくる。

「あぁもったいない・・・髪が黒ならばもっと似合う服があるだろうに・・・すらっとしているんだから毛皮のコートなんてどうだい？メイドの格好よりよっぽどいいよ・・・アクセサリーもつけたらいいよ。私の子猫ちゃんは相変わらずセンスがないねぇ」

うっとりしながらどこかの世界へ旅だってしまったようだ。

「私のご主人を子猫ちゃんなんて言い方しないでくださいよ、ルチカさん。シャエズさんは貴方の物じゃないですしセンスもいいです！」

リエラが心外だ！と言わんばかりにルチカの前にたつ。

「あぁ、すまないね。ヒラヒラしたのが好みじゃないんだよ。君も２６になるんだからいい加減歳相応の格好をした方がいい。大人には大人に相応しい服装があるんだよ」

とさらっとあしらわれたリエラを見る。に・・・にじゅうろくー？！！

私から視線を浴びてる事に気がつきリエラは顔を真っ赤にした。

「まずこんな可愛い子が遊びに来たのなら私にまっさきに紹介すべきだと思うね、ハロドもいったい何を考えてるのかさっぱりだよ」と苦笑いをするが私には貴方が何を考えてるのかさっぱりです。そんなやり取りをしていたら後ろから肩に手をかけられた。

「お前何者なんだよ！！！」
「あっ！！！！あんた！！！！！食い逃げしといてよく私の前に顔だせ――」
「いったいお前は何者なんだ？！」
怪奇な目で見られて私は困った。なんなんだろいったい。

「まぁまぁ、お前さん、かわいこちゃんが困ってるだろう？さ、お茶でも出すからうちにおいで。」

そうして私はルチカさんの店に入る事になった。

ルチカの店

真っ白な毛皮の絨毯の上に長いカウンターと金庫しかないガラーンとした店の中に案内されカリンとカルゾとリエラはぞろぞろと入っていく。

「飲み物は何がいいんだい？」
「俺は酒をくれ」
「昼間っからかい？ふふふ…お前さんろくでなしの匂いがするねぇ…まぁそんなんでも私はいっこうに構わないよ。食べさせてあげるよ」
「てめー何の話してんだよ、俺が構うわ」
「照れなくてもいいだろうに…さぁかわいこちゃん達は何を飲む？」

「私は温かいお茶を…」
「私は何でもいいです…」
だって何があるのかわかんないし…

「何でもいいのかい？じゃあ私のとっておきの飲み物を出してあげるよ、かわいこちゃんにとっても似合うだろうねぇ…赤とむらさ――あぁ…椅子もださなくてすまない」

ルチカがパチンと指を鳴らすと大きめの机と椅子が人数分出てきた。
机の上には飲み物とお菓子が並んでいる。

私は驚いて目を見開いたが他の人達は平然としている。魔法なんて本か映画の中でしか存在しなかったもん…私は一生馴れないだろうと思った。

私の飲み物は赤と紫のグラデーションのかかった物で匂いを嗅ぐと甘い香りがした。

「さぁ、それでいったいどうしたのか話してごらんよ？」
「なんでてめぇが仕切ってんの？」
「細かい事をごちゃごちゃ言う人は好かれないよ？お前さん」「はぁー…まったくやりにくいんだよお前ら…」

お前らって何よ！お前らって！
内心そう思ったがこいつに何を言っても無駄だと思い睨むだけに留まった。

「さっき名もなき森に行ってきたんだよ」

「あのくだらないに森かい？」「名もないなら森でいいぢゃん」「え…何しに…？」
と3人同時に言った。

「聞けよ！だからやりにくいんだよお前ら！！！」
はぁ～…とため息混じりに言うカルゾを見て3人は目を合わせクスって笑った。
この2人がいればこいつもやり込めそうな気がする。

「したら湖がなくなってた。」

「え！それは大変！急いでハロド様にご報告しなくては！」
と慌てて席を立つリエラにカルゾが言う。
「だから聞けって。まだハロドには言わなくていい。とりあえず座れよ」

そう言われソワソワしながらもリエラは席に座った。

「湖はなくなってたけど湖があった場所に神殿が建ってた。…氷の」
リエラとルチカが驚いたような顔をしていたが私には何の事なのかさっぱりわからなかった。

「触れてみようとしたけどダメだった。結界が張ってあって…」
「かなりの手練のようだね。あたりに人はいなかったのかい？まぁ多分神殿内だろうけどね。」「人はいなかった。俺でも殺されるかと思ったくらいの何かを感じた。」
「ふふふ…お前さんが怯えるなんて…」

それで…？って感じにその場においてけぼりにされてる感じがした。

「そんで人外に話し掛けられたんだけど、妙にかたっくるしい言葉で喋る奴だったけどそいつが最後に言った言葉が問題なんだ。」
「愛してるとでも言われたかい？お前さんは照れ屋だからねぇ…くくく…」

イライラしてます。と顔に書いてあるぐらい怒りが浮かんでいる。

「黒の瞳を持つ者がこの神殿に入れるって言ったんだ。」

一斉に私に注目が集まる。

「結果はこうだけど途中俺は殺されるとこだったんだよ、そいつに。立ち去れって何回言われたかもわかんねーくらい居座ったからな」

「それって自業自得ぢゃん」

「んだよジゴウジトクって。」

この世界の範囲がわかりません…

「自分がいけない事したら自分自身に返ってくるよって意味。」

「ふふふ…まるでカルゾの為にある言葉じゃないか。おや、まだ名前を聞いていなかったねぇ。言の葉の君」

「え？私の事？」

「そうさ、今新しい言葉を彼にあげたんだろう？だからかわいこちゃんはリエラに譲ってあげて君は言の葉の君だよ」

不思議の国に迷いこんだんですね私って。

とりあえず頭の上に浮かんだ？を払い答えた。
「相崎花梨です。」

「アイザキか、私はルチカ。よろしく頼むよ。…不思議なオーラを感じるね、心地がいいよ」

「はぁ…でも私魔法も使えないのに…。この世界だって来たばっかなのにそんなのわからない…」

「ふむ…アイザキは遠いとこから来たんだったね、魔法が使えないってまったくなのかい？それも珍しいねぇ」

「こいつこそ人外だよな－あいつが言ってんのって確実にお前の事だと思うよ。黒い瞳なんてこの世界に存在しねぇし。だからお前何者なんだよ」

「何者って…何者でもないよ。ただの人間としか私には言えないよ…」

「ほらほら、言の葉の君を困らせるんじゃないよ。男は女性に優しくするものだよ。」

「これが女かよ」

「この美しさで女性でなければなんなんだい？アイザキ。安心していいよ、それは神様なんだからねぇ」

「神様…？」

「神殿なんだから神様だろう？恐い存在じゃないさ」

「わかんねーぞ？魔物だって神を語ったりすんだから」

「うー…やっぱり私ハロド様に伝えてきます。名もなき森は村人も行きますし、何か危険があったら…カルゾさんが…その…勝てない存在がいるならすぐにでも村人に言わなければなりませんから…」

「まぁな、でもこいつの事は言わなくていい」

「分かりました。でわ…カリンさんは…？」

「私が送って行くから心配しなくていいよ、早くハロドに伝えておやり」

リエラが帰った後私は出された飲み物を飲みながら考えていた。

神様だったら私を帰せるかもしれない。

私はすぐにその考えを話した。

「おや、アイザキは帰れないのかい？可哀相に…」

「殺されたらどーするんだよ」

「元の世界では多分瀕死だもん。どーせ死ぬなら元の世界で死にた

い。帰れないって悩んでるより行動してたいし…」

「死んでる？アイザキは幽霊なのかい？」

「多分…そんな感じ。だから最初ここが天国だと思ったし、私の世界では魔法とか魔物は空想の物だったから今だに魔法とか魔物とか…実感湧かないからわかんないの」

「俺はこいつが言ってる意味がさっぱりわかんね。」

「ふふふ、君はおバカさんだねぇ。ありのまま受け取ればいいんだよ、アイザキは帰りたいから神様に会いに行く。相手も会いたがっているんだ、いい事じゃないか。君はとやかく考えすぎるよ」

「お前みたいに考えなしじゃねぇんだよ」

「明日行ってみるよ…ここになんで来たのかもわかんないし」

そうして私は名もなき森の湖の跡地へ行く事となった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1210n/

F-M-Q

2010年10月28日23時33分発行